南東アナトリア先土器新石器時代の丘上遺跡
―ハルベトスワン・テペシ遺跡の第一次調査(2022 年)―

松井　孝典　千葉工業大学地球学研究センター所長
西秋　良宏　東京大学総合研究博物館館長
下釜　和也　千葉工業大学地球学研究センター研究員
ジェラール・ウルダー　シャンルウルファ博物館館長
森脇　涼太　千葉工業大学地球学研究センター研究員
多田　賢弘　千葉工業大学地球学研究センター研究員
鈴木　健太　千葉工業大学地球学研究センター研究員
新井　才二　東京大学人文社会系研究科助教

Exploring a Pre-Pottery Neolithic Hill-top Site: The 2022 Investigations at Harbetsuvan Tepesi, Southeastern Anatolia, Turkey

MATSUI, Takafumi　Director, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
NISHIAKI, Yoshihiro　Director, University Museum, University of Tokyo
SHIMOGAMA, Kazuya　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
ULUDAĞ, Celal　Director, Şanlıurfa Museum
MORIWAKI, Ryota　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
TADA, Toshihiro　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
SUZUKI, Kenta　Associate Researcher, Institute for Geo-Cosmology, Chiba Institute of Technology
ARAI, Saiji　Research Associate, Department of Archaeology, the University of Tokyo

1. はじめに

西アジア地域では、今から約１万２千年前に完新世が始まって以来、人類の生活様式が狩猟採集から農耕牧畜へと大きく変わっていった。現在のトルコ共和国の大部分を占めるアナトリアは、隣接する北メソポタミアや地中海東岸一帯のレヴァント地域と並んで、そうした新石器時代の文化変容の舞台であった。人類史上まれに見るこの大きな転換は、生業や文化、社会など人間の側の根本的な変化を意味するだけにとどまらず、人間の活動によって地球環境にも不可逆的な影響を及ぼしはじめたと言うことができる。この点においてアナトリア新石器時代の研究は、人間社会と地球環境の共進化を探る上でも極めて重要である。

南東アナトリアでは近年、初期新石器時代の遺跡の発見が相次いでいる。丘上の巨石遺構で知られるギョベックリ・テペ遺跡やカラハンテペ遺跡に代表されるように、従来の定説では説明できない奇妙な遺跡が議論を呼んでいる。発掘調査を通じて、それらの遺跡は狩猟採集段階にあった集団がつくりだした大規模遺跡であったことが分かってきた。しかし、それが季節的に祭祀が営まれた宗教遺跡なのか、それとも定住的な集落遺跡だったのか、その後に始まった農耕牧畜民の文化とどういう関係にあったのか、そのような初期新石器時代の遺跡がなぜ突如として南東アナトリアで出現したのか、そして、それは更新世から完新世初頭にかけての地球環境の変化とどのような関係にあったのかなど、考古学的に解明されていない問題が多く残されている。

初期新石器時代に関わる諸問題の解明に向けて、2022 年、千葉工業大学地球学研究センターと東京大学総合研究博物館はウルファ博物館と共同で、シャンルウルファ県の新石器時代遺跡における考古学調査を開始した。本調査は、トルコ共和国文化観光省と同国・観光広報開発庁によるシャンルウルファ新石器時代研究プロジェクト、通称「タシュ・テペレル・プロジェクト(*Taş Tepeler Project*)」の一環として実施している。これはギョベックリ・テペをはじめとするシャンルウルファ県域の遺跡調査を通じて、総合的な新石器時代研究に取り組むものである。

2. 遺跡の概要とこれまでの調査

2022 年に私たちが最初に手がけたのはハルベトスワン・テペシという遺跡である。遺跡はシャンルウル

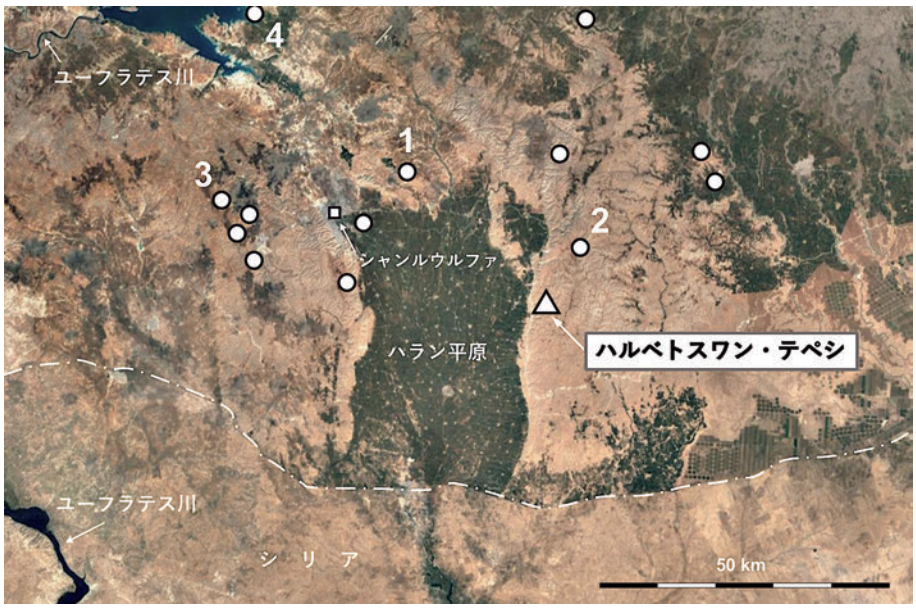

図1　ハルベトスワン・テペシ遺跡の位置と関連する初期新石器時代遺跡(1：ギョベックリ・テペ、2：カラハンテペ、3：アヤンラル・ホユック、4：ネヴァル・チョリ)

図2　ハルベトスワン・テペシ遺跡の景観

ファ市から南東におよそ44 km離れた石灰岩の丘陵の頂きに立地している(**図1、図2**)。遺跡からは西にハラン平原を見晴らし、北西にはギョベックリ・テペを遠望することができる。そして北東方向には、最近ギョベックリ・テペのそれをしのぐ規模の石柱建築の発見が相次ぐカラハンテペ遺跡を視野におさめる。初期新石器時代の巨大遺跡を相互に視認できるという展望台のような絶好の立地であるにもかかわらず、それらに比べて遺跡そのものの規模は小さく、1 haに満たない。

ハルベトスワン・テペシ遺跡は2014年、シャンルウルファ博物館が中心におこなった遺跡分布調査によって初めて発見された。発見当時、遺跡は多くの地点ですでに盗掘を受けていたため、2017年から2019年にかけてシャンルウルファ博物館を中心とするトルコの調査団が緊急調査を実施している。盗掘が認められた地点を11箇所ほど任意に選んで試掘調査がおこなわれた結果、そのほぼすべてで半地下式の矩形・方形遺構を見つけた。一部の遺構の室内には、ギョベックリ・テペのようなT字形ではないが、石灰岩を削ってつくった石柱が立てられていた。また、男性を表した人物彫像が1点出土したほか、フリントや黒曜

石の石器、磨製石器類、石製ビーズなどが出土したことが報告されている。出土した石器群と遺構の特徴から、調査者は先土器新石器時代B期(PPNB)の前葉にあたる遺跡であろうと結論付けている。さらに、丘上に立地し、規模は小さいものの石柱をもつ建築遺構が見つかったことから、ギョベックリ・テペと似た祭祀センターであったと推定されている。しかし、他の遺跡と比較する際に有力なツールとなる放射性炭素年代による年代同定や、動植物利用のあり方、遺構の分布範囲など、遺跡の性格を知る上で重要な調査、分析はまだ十分おこなわれていない。

3. ハルベトスワン・テペシ遺跡の調査

今回の再調査では、遺跡に関わる基本的な考古学データを得て、その実像を解明する糸口とすることを目的とし、2022年8月下旬から9月中旬まで約3週間の日程で現地調査を実施した。主に実施したのは、地形測量、地中探査、遺物の表面採集、旧発掘遺構の清掃と精査の4点である。

まず遺跡の現状を記録し、立地の特徴を知るために地形測量をおこなった。衛星測位技術であるRTK測位と無人航空機(ドローン)を組み合わせて、ハルベトスワン・テペシ遺跡とその周辺地域を対象にした高精度のフォトグラメトリ測量をおこなった。これによって、遺跡が北西-南東方向に約95m、北東-南西方向に約75mの楕円形を呈していること、人工的な堆積土が分布する遺跡の規模は0.6haであることを確かめた。また、石灰岩の丘陵をなす岩盤の形状を詳細に計測した結果、遺跡はおよそ2.4m程度の人工堆積から形成されていることが推定できた。

さらに、遺跡周辺の地形測量を実施した結果、ハルベトスワン・テペシ遺跡と同じく、丘陵の頂上にある丘状の遺跡1件を確認した。さらに、周辺の谷筋の上流部にも複数の地点で、円形や矩形の石列群が分布していることが明らかとなった。これらの遺構群には、いずれも薄い褐色土の堆積を伴っていて、なんらかの人間活動があったことを示唆している。新石器時代の狩猟採集民のキャンプ跡であった可能性もあり、次期調査で詳しく調べてみたいと考えている。

それと併行して、遺跡の地下に眠る構造物を非破壊でスキャンするべく地中探査に着手した。これによって遺跡の構造を探るとともに、今後の本格的な発掘調査の指針を得ることができる。地中探査は、磁気探査と地中レーダー探査の2つの方法でおこなった。遺跡の北半を対象にした磁気探査では、遺跡の中央部付近で複数の矩形の磁気異常が検出された。これらの磁気異常は、以前の発掘調査で見つかっているような矩形の遺構が隣接して分布していることを示唆する。さらに、遺跡の外周にあたる区域では、遺跡全体を囲むような線状の磁気異常が検出され、周壁のような遺構が存在している可能性がある。同様の反応は、電磁波を利用して地下埋蔵物を把握する地中レーダー探査でも、基盤岩と人工堆積の間の反応の違いとして明瞭に確認されている。しかし、これらの反応が検出された地点は、いずれも遺跡の裾部、つまり基盤岩にほど近い場所にあたっており、大きな石壁遺構があれば地表面に露出していてもおかしくない。探査成果を検証するためには、実際に試掘して確かめる必要がある。

遺跡の年代推定について大きな成果があったのは、遺物の表面採集である。3千点近い石器を採集して検討した結果、2種類の石器群からなることが明らかになった。大多数の採集石器は、ナヴィフォーム型石核による石刃や、それを基につくられた尖頭器(ビブロス型)、光沢を有する鎌刃などからなる。少数ながら黒曜石の石刃片も採集することができた。これらは北シリアから南東アナトリアで知られている先土器新石器時代B期前葉に位置付けられる石器群で、トルコ隊による遺跡の年代推定とも符合する。これに対して注目されるのは、細石刃による三日月形石器の存在である。これらはもっと古い終末期旧石器時代に典型的な石器群で、従来知られていない古段階の居住層が最下層に眠っている可能性を示している。

以上の調査と併行しながら、かつてトルコ隊が発掘した遺構の清掃と精査を手がけた。2022年に対象としたのは遺跡のほぼ中央、地形測量によって最も堆積層が厚いと考えられる試掘区2箇所(5m×5mの旧K13区、および8m×8mの旧K5/19区)である。これらの旧発掘区は遺跡から出土した大小の石灰岩で無造作にしかも大量に埋め戻されていたため、それを除去する作業にかなりの時間を費やすこととなった(**図3**)。完全に清掃できたK13区では、南北の部屋遺構の構造を精査することができた(**図4**)。その結果、ベンチ状遺構をもつ北側の部屋は少なくとも2つの時期の改築であったらしいこと、石灰の漆喰を使った立派な床づくり(いわゆるテラッツォ床)は伴わないことを確認することができた。

高さ1.5mほどの石柱一対をもつK5/19区の方形遺構では、以前の埋め戻しによる礫群を完全に除去す

図 3　トルコ隊が調査した遺構を再調査している様子

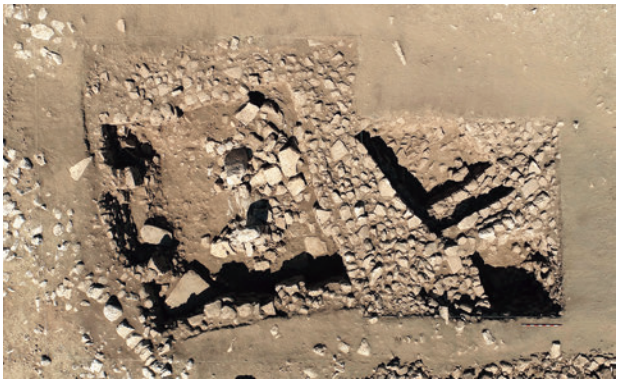

図 4　先土器新石器時代の遺構群の空撮（左が K5/19 区、右に接するのが K13 区である）

図 5　2 本の石柱が屹立する方形遺構

ることはかなわなかったが、各壁面に扶壁状の張り出しやニッチ状の施設をもつことを確認した（**図 5**）。

遺構の精査にあたって、本来の堆積土のなかから石器や、磨り石、石製ビーズなどの考古遺物、動物骨を回収した。石器には石核や長さ 10 cm を超える石刃や打ち割り失敗品も含まれていて、遺跡で石器製作がおこなわれたことを示す。また、穿孔具としての石錐の存在からみて、ビーズに孔を開ける作業も遺跡でおこなわれていたらしい。出土した磨製石器類はわずか数点の破片だが、製粉の道具であったとみられる。今回得られた遺物はわずかな量だが、以上の所見は狩猟で使う石器づくりやビーズ製作、食糧加工など、ハルベトスワン遺跡では日常的な生活が営まれていたことを物語っている。今のところ、炉跡などの痕跡は見いだせないが、非日常の祭祀を示唆するような特殊な遺物が見当たらないことは極めて興味深い。また、今回の調査で回収できた炭化物サンプル数点は、放射性炭素年代測定をおこなうべく準備を進めている。

4. おわりに

2022 年の調査は予備的な性格が強いものであったが、年代推定や遺構に関して、以前の発掘調査の成果に見直しを迫る成果を得ることができた。また、先端技術による地形測量や地中探査を実施することによって、これまで知られていなかったハルベトスワン・テペシ遺跡の実態を解き明かす手がかりが数多く得られた点において、本調査のもつ意義は大きい。

次の調査では今回の成果を基にして、地中探査と遺構の精査を続けるとともに、予想される下層、古段階の居住層が本当にあるかどうかを突き止めることが第一の目的になるだろう。出土した石器や動物骨など遺物の分析を通じた物質文化、生業活動の解明も期待される。ギョベックリ・テペなどと同じく狩猟採集民が残した集落であったかどうかを確かめることも重要である。その意味で、今回発見したハルベトスワン・テペシ遺跡周辺の谷部の遺構群は、初期新石器時代の居住動態を解明するための鍵となる可能性を秘めている。

ハルベトスワン・テペシ遺跡は、規模や居住期間、物質文化の内容からみて、ギョベックリ・テペやカラハンテペと肩をならべる遺跡では到底ない。しかし、これらの大規模遺跡で解明できない南東アナトリアにおける初期新石器時代の諸問題を、それらとは異なる視点から検証できる絶好の遺跡であろう。

なお、本調査の実施にあたって、大村幸弘所長をはじめとする中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の皆様から多大なご支援とご協力を賜った。また、イスタンブル大学のネジュミ・カルル教授、シャンルウルファ文化遺産保護局のヴォルカン・ロルドール氏、シャンルウルファ博物館のアジズ・エルギン研究員、シャンルウルファ県知事サリフ・アイハン氏、エイユビイェ市ほか多くの機関および個人の皆様に現地調査の遂行にさまざまなご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

■参考文献

・Çelik, B. 2016 A small-scale cult centre in southeast Turkey: Harbetsuvan Tepesi. *Documenta Praehistorica* XLIII: 421–428.
・Çelik, B., and C. Uludağ 2020 2017 ve 2018 Yılı Harbetsuvan Tepesi Kazı ve Temizlik Çalışması. 41. *Kazı Sonuçları Toplantısı,* 1. *cilt,* pp: 337–356. Ankara, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
・Çelik, B. and H. Tosyagülü Çelik 2020 Harbetsuvan Tepesi 2019 Yılı Kazı Çalışması. *Karadeniz Uluslararası Bilimsel Dergi* 48: 303–326.
・Uludağ, C., B. Çelik and K. Talon 2018 Harbetsuvan Tepesi'nden Bir Erkek Heykelciği. *Karadeniz* 38: 84–91.